

---

# 囚人の戯れ。

森本エリ

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

囚人の戯れ。

### 【Nコード】

N5347B

### 【作者名】

森本エリ

### 【あらすじ】

『メランコリックの囚人。』のその後の話。囚われたままだった青年が、海辺で女と出会い、一人の男になる。

囚人の戯れ。

彼が死んで、現状は一変した。  
環境は目まぐるしく変化し、おれは、彼の後を継ぐことになってしまった。

人々の相談役や、頼み事を、誰かを動かす、実行させる。  
もっとも、内容と言え、誰かにとって目障りな人間を、内密に、秘密裏に、闇に葬る事が大半だった。

おれは名前という“記号”しか知らないものを“消すこと”に、  
なんの罪も感じなかった。

胸の辺りに穴が開いていて、そういった出来事がただそこへ通り過ぎて行くだけだった。

もし、“記号”たちの“人生”のようなものを知ったなら、少しは違ったかも知れない。

仕事を終えたと報告されても、言葉はこめかみの辺りを通り過ぎていくだけだったし、相変わらず、感情も風穴を過ぎた。

ガバメントを愛する殺し屋が、金属の肌について、愛しげに語るのさえ、おれにはどうでもいいことだった。

太さ二センチほどの葉巻を、巻を、シガーケースから取り出して薫りを味わいながら石灰が白く塗られた壁の、一枚のステンドグラスの窓が陽射に透けて色つきの影を落としているのを見ていた。

彼にこなれたオールドブラウンのレザーリクライニングチェアは誰かの懐のように心地よかった。

遠くで鐘が鳴るのが聞こえた。

出掛けて来る。と側にいた弁護士と税理士に告げて、おれはジャ

ケットとボルサリーノを身に着けた。

彼らは心配そうな素振りを見せたが、おれには関係のないことだった。

達観したわけでもなく、人の死と言うものが、ひどく曖昧で不明瞭で、実感を覚えられないのだ。

こんなおれが死のうと、同じだろう。

が、もし、立て続けにボスが不可解な死を遂げれば、組織はこれ以上ない窮地に追い込まれてしまうだろう。それはおれにも、理解できる。

だから、おれは、なるべく気をつけるつもりでいる。

しかし、やはり何もかもが、無味乾燥としていた。簡単に言えば、全てがつまらなかった。

おれにとつて、この光に溢れた美しい昼の世界さえ、モノクロームとなんら代わり映えしないのだ。

親愛なる人の不在が、このような影響を自分に及ぼすのか、と知った。

思わず目を細めなくなるような、顎の辺りを撫でるようにそよぐ風も、小鳥の囀りも、木々の葉が擦れる音にも、愛想なしにおれは歩いた。

初夏の美しい昼だった。

彼のがなければ、おれにとって、全て慈しむべきもの達で溢れた日だった。

屋敷から町までハイヤーに乗り、そこから海辺までは歩いた。

松の木々が、潮風を受け止めさせられる為に雑然と生えていた。

海は限り無く広くあった。  
営みの息吹を聴きながら、おれはその偉大なる虚無に魅せられていた。

ジャケットを脱ぎ捨て、タイを緩めて、そこへ向かった。  
レーザーソウルが砂粒に埋もれてしまうのさえ、気にならなかった。  
ガンベルトに収まった鈍色の凶器が、水を嫌っていても他愛のないことだった。

海水が足をとり纏わりつく。飛沫が顔に飛んできても気にならなかった。おれは海に呼ばれている。それだけが確かなことだった。

抱え切れない漠然とした諦めが、おれを操っていた。この先、どこまでこの足で進めるのかと、ただ歩いた。  
腰にあった凶器は沈黙し、身体に打ち寄せる水音だけが感じられる。

遠くで女の悲鳴がして、水面を突き破るような足音がこちらに向かってくるようだった。  
その物音が近づいて、腕が掴まれた。

「早まってはいけないわ」

おれの腕を抱き込み、女は切迫したように言った。

見開かれたアーモンド型のアッシュブラックアイズが飛び込んできた。

「神は許さない。それだけは、いけないことなのよ」

わななく薔薇色の唇が、重大な事を告げるように言葉を押し出した。

囚人の戯れ。

「呼ばれていただけだよ」

おれがそう答えると女は怪訝そうに眉を顰めた。

「気が狂っているのね？」

「おれが、かい？」

息切れた女の真剣な声がおかしくなつて、おれは肩をすくめた。

「他に、誰が？」

女は真剣な眼差しのまま言った。

「大切な人を失った事があるかい？」

おれはおれで真剣に女に訊いた。

「ないわ」

女は首を横に振った。

「親友であり、兄でもあり、父であり、主でもあつた。彼を尊敬して、慕っていた。おれはそんな人を失ってしまったんだ」

「可哀想。悲しみが強過ぎて、辛いのね」

「聞いてくれるつもりか」

囚人の戯れ。

「ええ、いいわ。でも、家にいらして、ごちそうするわ。あなた、とても真つ青よ」

彼女の手が頬を撫でた時、柔らかさと暖かさに気づいた。

おれと彼女は松原に引き返し、彼女がおれのジャケットや風で飛んだボルサリーノをかきあつめてくれた。

おれは砂浜から離れた所にある赤い車をみた。

ぴかぴか光った車は筆入れのようにみえたが、それは彼女のものだった。

黒い丸く襟ぐりの開いた薄いワンピースの下には何も着ていないように見えた。

スカートの下から伸びた健康的な素足が、海水に濡れていた。潮風に吹かれ、すぐに乾くだろう。

おれのスラックスは、そももいかないだろうが。

多分に海水を含んだ足許が、ひどく気持ち悪い。

おれはそんな事を考えながら、その車に乗るのを躊躇していた。

女が運転席からおれの様子に気づいて、笑いかけてきた。

「気にしなくていいのよ。これは大きな靴だと思えばいいわ」

誰の靴ならこんなに大きいのかと思っただが、女の愛嬌だとわかっていたので、おれは黙って助手席に乗った。

カーステからラフマニノフが、午後の車窓に流れて行く。

太陽は金色に空気を染めていた。透ける緑の並木やきらめく海

も流れて、おれを乗せた、筆入れみたいな赤い巨人の靴は、おれの

(彼の) 街を抜けた。

女の家は違う街にあった。

ついでに言えば、寄宿舎のようにも見えたが、売春婦の溜まり場でもあった。

変わった客の引き方だな。と思いながら、おれは先に階段を昇る女の尻を見ていた。

下着をつけているのかいないのかわからなかったが、それ以上に、この女がああ海岸にいたのが不思議でならなかった。

古い板張りの階段には踏まれすぎたカーペットが敷かれていたが、小さく悲鳴をあげた。

「驚いた？」

部屋につくなり、女は恥じらったような笑みを見せて首をかしげた。

「いや、別に」

おれはそれだけ答えて部屋を見回した。

白塗りの壁に、ベッドと、鏡のついた化粧台。黒い板張りの床。ベツドの足許に大きな窓があって、側に古びたピアノと椅子が置かれていた。

埃くさかったが、ピアノがあるのがおれの気に入った。

「ピアノが弾けるのか」

おれが尋ねると、女は曖昧に笑った。

「……ええ」

囚人の戯れ。

ぎこちない素振り、女はピアノの前に座り、ショパンのノクターンを弾き始めた。

静かな旋律から激しさと哀しみに変わり、また静けさへとかえる。

おれは女の肩に唇を落とし、女は困惑した。

「続けてくれ」

女はおれの言う通りにした。

おれは女の肩とうなじに、愛撫を続けた。

約四分間、それだけの間に女の息は上がっていた。旋律が途切れるのを許さなかった。

うなじの後れ毛は柔らかく、日向の匂いがした。

曲が終わり、ようやくおれは女を許した。

女は解放された。

日ざらしのシートが暖かい。

濡れた衣服から、おれも解放された。

日が傾きかけて、金色は濃く、深みを帯びていた。

女は初めの約束通り、食事を用意した。

ズツパ・デイ・ペツシエ。

魚介類をトマトで煮込んだブイヤベース様の料理と、アルゲーロトルバート。辛口の白ワイン。

そして、リゾット・ペスカトーレ。

海辺の町の娯館というよりは、レストランにいるようだった。

テラスで海を見ながら、食事をしていると、ようやく身体が機能

囚人の戯れ。

して来たように思えた。

「すごいな」

おれは独白のように呟いて、ワインを飲んだ。  
目の前で女が笑った。

「人間、美味しいものを食べて、飲んで感じる事が出来れば、幸せになれるのよ」

眩しい笑顔に釣られておれは、久しぶりに口角があがるのを感じた。

「あたし、大切な人を失うどころか、大切な人さえもない」

乱れた髪の毛を直しもせず女は言った。  
陽に照らされた横顔が美しかった。

「時々、無性に海を見に行きたくなるの。ここから見えても、遠すぎるから」

女もワインを啜った。

空の食器の白、トマトの赤、飾りの香草の緑、グラスの中の金色。  
斜陽の中の柔らかな色彩が、確かに見える。

手摺に近づき、眼下にひまわり畑が広がっているのが見えた。

このまま、夜が来なければいいのにと、おれは願った。

傍らに寄り添う女の髪を撫でて、日向の匂いを胸一杯に吸い込んだ。  
おれは自然な幸福を甘受した。

囚人の戯れ。

「最初に死んだのは、おれの姉だった。恋人とのすれ違いを気に病んで、テラスから飛び下りたんだ」

女は鼻先をおれのわきにこすりつけた。

「恋人は姉の死を知って途方に暮れた。二人はおれの共通の知り合いでもあった。その恋人こそ、おれの尊敬する男だった。おれは二人の間にあった原因を知らなかったんだ。二人の問題は二人のものだからね」

女はおれの手を強く握り締める。

「おれはせめて、彼に以前の彼を取り戻して欲しいと思っていた。子供の時から憧れていた。彼の気に入った姉を誇らしく思えるほど」

「二度も大切な人を失ったのね」

「……いや、おれにとっては一度なのかもしれない」

「え？」

おれの呟きは風にかき消された。

「なんでもない。もう一度、ピアノを弾いてくれないか？」

女は頷き、おれたちは部屋に戻った。

おれは、彼のことを思い出しながら、音色に聴き入った。ジャケツトを手にとり、女の背後に近づいた。

シヨパン、ノクターン、“夜想曲”女の指。

懐には、デリンジャー。

そこいらにあった衣類を巻き付けたそれを、そつと女の後頭部に近づけた。

「大切な人を喪<sup>つしな</sup>つのは、これが二度目だ」

おれは引き金を引き、ピアノの音は 途切れた。

この街は、敵対する組織の支配下で、この女もこの娼館もそうだった。生きておれのものに出来ないのならば、殺して永遠におれのものにするしかなかった。

おれは鍵を手に、すぐさま部屋を出て、女の赤い車に乗り込んだ。

ラフマニノフ、ショパン、ピアノの音色。

色彩を取り戻してくれた女の温み。

太陽は海に沈んで行き、おれはおれの街へ辿り着いた。

海辺でガソリンを振りまき、車を燃やした。

太陽が消え失せて、夜想曲は色濃く、耳にこびりついたままだった。

囚人の戯れ。

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5347b/>

---

囚人の戯れ。

2009年3月11日13時53分発行